

研究報告

「函館高等水産学校（北大水産学部）とアジア・太平洋戦争－Ⅰ」

～同窓会報「親潮」にみる学徒出陣～

島津 彰

北翔大学北方圏学術情報センター学外研究員

抄 録

函館高等水産学校（現北大水産学部）は、1907年（明治40年）を開基とし、その間、アジア・太平洋戦争の禍中でも、同窓会活動として同窓会報「親潮」を発行し絆を深めてきた。北大百年史には水産学部の戦没者（167名）の名前のみの記載があり、戦死状況の記載はない。「親潮」や他の資料を併せ、戦没年や地域等、遺書等の情報収集に努め戦死状況の把握を行った。

また戦時下での「親潮」の果たした役割（戦地便り等での消息情報、同窓への慰問、遺族への支援）について考察した。後世にその時代に翻弄された若者の肉声を伝えることは、平和希求の土台として重要なことである。（以下、氏名は敬省略とし、地名用語は当時の呼称を使用。）

キーワード：北海道大学水産学部、学徒出陣、親潮、アジア・太平洋戦争、特攻

Ⅰ. 函館高等水産学校の略史及び「親潮」の略史

1. 函館高等水産学校の略史

函館高等水産学校（現北海道大学水産学部）の開基は、札幌農学校の1907年（明治40年4月）に水産学科の付設に始まり、東北帝国大学農科大学を経て、北海道帝国大学の附属水産専門部を分離し、函館高等水産学校として1935年（昭和10年4月）に開校した。続いて1944年（昭和19年）には函館水産専門学校（漁業科、水産増殖科、水産製造科）と改称した。

1941年（昭和16年5月）には漁業科の専攻科として遠洋漁業科（修業期間2年半の内1年半が乗船訓練）が設置された。後に海軍予備員制の役割をも担い、終戦までに2期の海軍幹部の養成を行った。1949年（昭和24年5月）に北海道大学水産学部、2000年（平成12年）には大学院の講座制に移行。2005年には水産科学研究院として研究をリードしている。

2. 同窓会報「親潮」の略史

同窓会活動として同窓会報「親潮」を発行し、同窓の絆を深めてきた。創刊号は「北水同窓会報」と称し、大正12年10月15日発行。「親潮」と改題したのは28号（昭和

10年6月）からで、昭和12年からは一月に1回の発行がみられる。発行回数は、戦争開始の昭和16年・昭和17年で9回、18年で8回、昭和19年で4回、昭和20年で3回である。発行回数の減少は、用紙の割り当て配給の減少等の状況が考えられる。116号（昭和26年1月）は、ガリ板刷りである。最新号は令和4年7月現在では、令和4年3月発行の318号である。

『「親潮」北大水産学部創基五十周年記念誌（昭和32年10月発行）』において、明治45年卒の渡辺宗重は「出版物については、警察の特高課の検閲がやかましかった。特に戦地よりの通信等は目を光らせていた。また、納本が発行日付より遅れたりするといくらかでも文句を言われたもので、当時の編集係は警察まで呼び出されて、うるさく叱責された事も度々であった。」と当時の苦勞を述懐している。

現存の「親潮」について、水産学部図書館が所蔵していない号を北海道立図書館で調査した結果、【44号～46号、48号～49号、61号～65号、67号、100号～110号】を所蔵。また、両図書館や国会図書館など他館も所蔵していない号は【43号、47号、50～57号【昭和13年8月～14年5月】、60号、66号、68号～73号【昭和15年5月～11月】、94号】であり、これらの19冊分は欠号として、集計・分析を行った。

戦死に関する記事が一面に掲載されるのは44号（昭和

13年2月）からであり、伏字（〇〇の様に、軍事情報が特定できないように記述）も44号から散見され、国家総動員法成立直前の言論統制が影を落としている。

107号（昭和20年5月31日）は戦中最後の発行で、106号まで記載のあった戦争に関する記事は一切掲載されていない。記事内容からも当局による新聞への一層の言論統制が考えられる。

108号は戦後初（昭和21年10月10日）の発行で、前号とは一年四ヶ月の空白があり、戦後の混沌とした時代背景が想定される。

II. 戦没者の概要

1. はじめに

『北大百年史部局史』（1139p～1141p）には「水産学部関係戦没者名簿」（167名）として名前だけの記載があるが、戦死状況の記載はない。「親潮」には、断片的な戦死に関する記事がある。本報告は、他の資料【『北海道大学水産学部七十五年史』、『北農《北農寮図書部発行の寮誌》』、『雲ながるる果てに』：白鷗遺族会編』、『海軍予備学生（中公文庫）』】等の記載内容を併わせ、戦没年や兵種・階級、戦没地域等の戦死状況を新しく見出した3名を加えて、37Pの表1にまとめた。



写真1 上官から弔意の手紙

2. 新しく見出された3名の戦没者

北大百年史に記載されている戦没者（167名）以外に、「親潮」で見出された戦没者3名の氏名を記す。

- 1) 村林 莊平：明治45年7月卒（東北帝国大学農科大学水産学科水産製造部）

《親潮：116号・昭和26年1月号》「会員死亡調べ・昭和26年1月調」の欄に、姉からの回答として、「昭和20年3月10日の東京大空襲で一家全滅」の知らせありの記事がある。

- 2) 相沢 国忠：大正9年卒（北海道帝国大学附属水産専門部製造科）

《親潮：116号・昭和26年1月号》同上の欄に、妻からの回答として「昭和20年3月10日の東京大空襲で死亡」の記事がある。

*「東京大空襲」により、戦没された上記2名については、『北大百年史』で氏名が掲載されている千石 丙（昭和14年卒）（昭和20年8月：宮城県気仙沼空襲で死亡：東北興業株式会社・気仙沼工場長）に準じて、戦没者とした。

3月10日の東京大空襲は279機のB29が約1665トンの焼夷弾が落とされ、死者が約8万3千人に及んだ未曾有の大混乱の中で、通信手段も限られ、情報収集が昭和26年にずれ込んだと考える。

- 3) 勝木 晃：昭和17年9月卒（函館高水・漁労科）
「親潮258」（平成7年10月31日発行）に勝木氏戦死の情報が記載されている。亡くなられたのが、戦後の混乱期の死亡だけに、百年史の名簿に情報が反映できなかったと考えられる。

「親潮271号」：平成12年3月1日発行）には、卒業後の9月30日、横須賀海軍航海学校（兵科第五期海軍予備学生：150名中・同窓20名）から海軍潜水学校へ。さらに昭和20年5月には海軍少尉として、特殊潜航艇（魚雷2本を積む特攻潜水艦）の「咬龍」の訓練隊員（50名中、同窓11名）となると記載がある。潜水訓練は過酷を極め、操縦室内は座っているだけのスペースしかなく、睡眠は電池室上のベニヤの上で寝る状態であった。事故も多く、精神的なストレスは想像以上と考えられる。また、時間を掛けて水圧に順応するように、高度の熟達を必要とした。これらの重圧の積み重ねの結果、昭和21年5月5日、小樽市の自宅にて戦病死されている。

3. 卒業年次別・戦没者

図1に示すように、昭和14年卒から増加しており、戦争の激化により最前線に赴かなければならない年代の影響が考えられる。

昭和16年からは、繰り上げ卒業が開始され、17年からは、半年早い9月に卒業し、海軍航空予備学生などの幹部候補生養成の道へと進んだ。

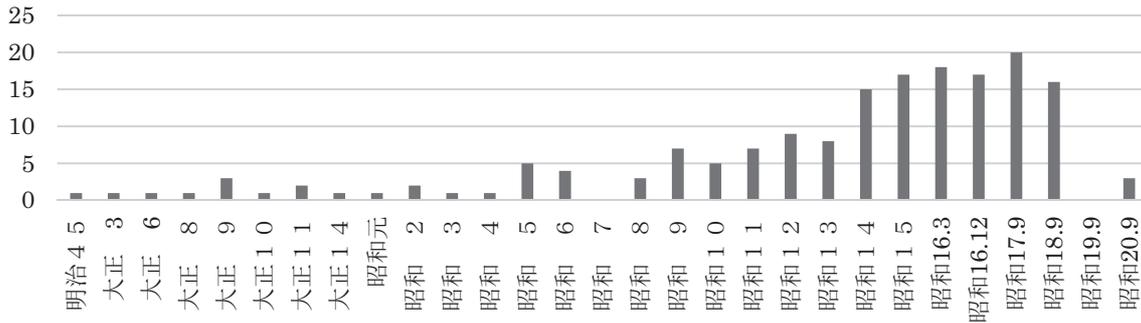


図1 卒業年次別・戦没者数

4. 戦没・年次・兵種・階級

年次毎の戦没者をみると昭和20年が40名と多く、次に19年の24名が続き、戦争の激化が影響している。日中戦争の激化する昭和12年の3名は最初の戦没者の方々である。なお、昭和21年になってからも戦病死で2名の方が戦没されている。

兵種では、陸軍が55名、海軍が28名であり、他は軍属及び会社員である。昭和17年9月の卒業生からは圧倒的に海軍が多い。尉官以上の階級では、陸軍では大尉13名、中尉12名、少尉7名と合計32名で半数を超えている。海軍では少佐1名、大尉7名、中尉14名、少尉3名の合計25名とほとんどが尉官である。当時では高学歴者であり、予備士官学校への道に進む者が多かった結果と考える。

また会社員や軍属として南方方面で漁業資源の調達に当たって亡くなられた方が8名おり、水産を学び商業活動に活かした結果の特徴的な様相である。

5. 地域別の戦没者

図2に示すように、主な戦没地域である中国、比島、ビルマを比較すると昭和12年から16年までは中国が多く、17年を境に南方戦線である比島、ビルマが多くなり、取り分け19年からは比島が多くを占めている。

また、表1に示すように、激戦地のノモンハンで3名、ガダルカナルで4名、沖縄で8名、ニューギニアで

5名、ペリリュー島、硫黄島で2名の方が亡くなっている。さらに、昭和20年8月14日の函館空襲で1名、翌日の北海道空襲でも1名の勤労動員中の学生が亡くなっている（後述）。

Ⅲ. 戦没の様相

1. 先輩を護衛し、共に戦死した後輩

1) 大正14年卒の竹井三郎：陸軍中尉で北部軍管区司令部に軍務し、北千島パラムシル島から沖縄へと転戦のため、輸送船・大成丸に乗船。昭和20年4月19日に、北海道日高町厚賀南東沖8K海上で、米潜（Sunfish）による雷撃を受け、撃沈戦死している。《親潮：1208》には、竹井の記事の記載あり。

2) 昭和18年卒の金森 勝：大成丸を護衛し、同じ米潜に先に雷撃で撃沈した、特務艦・快鳳丸の航海長。先輩を護衛し同じ海域にて戦死している。《北大水産学部七十五年史》には、金森氏の記載があるが、両者の関係性についての記述はない。筆者も戦没年月日が同一である事に気づき、調査過程で関係性が分かった次第である。

*大成丸の慰霊碑は、日高町厚賀及び日高町厚賀の弘専寺境内の2か所にある。また、大成丸生存者の記録として「記者たちの戦争」（北海道新聞社労働組合）（径書房）があり、当時の戦禍の記載がある。

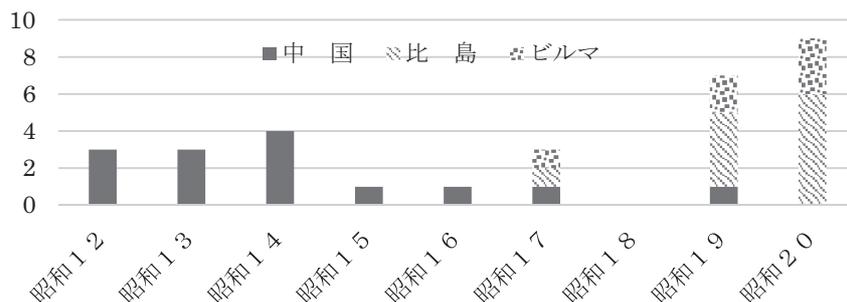


図2 地域別・戦没者数

その熱血の 喚ぶありて
 眸揚げて 眺むれば
 五稜原頭 雨ぞふる
 (同窓会認定・歌詞)
 「親潮：207・53年6月」



写真3 逍遙歌

* 作詞を手掛けただけに、文才の片鱗が随所にみられる。3番の詞にある「戦世の庭に 咲く花の・・・」にあるように、戦世でなければ大いに文才を発揮したに違いない。

4. 北海道開拓功労者の孫の戦死

昭和17年9月卒の湯地定勝：(海軍・大尉)は二五二海軍航空隊・戦304に所属。昭和20年2月16日に、木更津上空にてグラマン戦闘機と交戦中に戦死。湯地の祖父定基薩摩藩士は北海道三県時代の根室県の初代県令であり、その令妹は日露戦争時の乃木希典大将の静子令夫人である。定勝の父親(定武)は、定基の四男であり、札幌農学校の卒業生である。

《親潮：213, 250, 253》

(親潮213・昭和55年6月：同期：窪田 光信氏記：《故海軍大尉湯地定勝君の(17ギ)の35年祀に招かれて》【・・・昭和17年卒業と同時に第11期海軍飛行科予備学生として・・・館山航空隊一戦闘304飛行隊に配属されたのである。・・・湯地家にとって深いゆかりのある乃木会館での慰霊祭にお招きを受けたのである。・・・

故海軍大尉湯地定勝君(17ギ)の35年祀に招かれて

窪田 光信(17ギ)



大本営発表(昭和20年2月17日15時30分)第769号
 1. 敵艦載機は本2月17日より昨16日に引続き関東地方及静岡県下に来襲せり
 2. 本土来襲の敵機動部隊に対する昨16日の遊撃戦果中現在迄に確認せるもの次の如し
 飛行機撃墜 147機、損害を与へたるもの50機以上、艦船大破炎上大型艦1隻、

写真4 親潮213号・故湯地大尉

猛者ぞろいの柔道部の黄金時代にあつて、数多い対外時代の勝利を飾る立役者であった。・・・部下に対しても理解ある面倒みのいい上官であった。・・・その日私は、逍遙歌の譜面と歌詞を染めた手拭いを携えた。・・・定勝君の霊を呼び戻すべく、我々8人は精一杯の思いを込めて絶唱した。・・・】

■(北大水産学部七十五年史・334p)『(本人から宛宛の手紙)：其の後御元気ですか。小生毎日大空を飛び廻っています。・・・今日は香川県の友達(筆者註：田中裕：昭17漁の実家で、田中は十九年九月二十一日戦死)の所に来て、自宅の心算で一泊し寛いで居る所だ。・・・面会の日を楽しみに筆を止めます。』

『昭和二十年二月十六日、敵スプルアンス艦隊が、初めて艦載機群で東京を攻撃した。攻撃は二日間にわたったが、その初日の十六日八時、二五二空に所属のゼロ戦湯地機は勇躍館山基地を発進、木更津上空において敵グラマン戦闘機十機と交戦、ついに壮烈なる戦死をとげたのである。』

■(「雲ながるる果てに」：白鷗遺族会編：10pに氏名記載)

* 3代に亘って、北海道にご縁のある一族である。

5. 学業を中退した、応召者の戦死

渡辺豪喜：(陸軍上等兵)学業を中退しなければ本来は、昭和14年卒。(昭和20年：1945年9月に卒業認定)江西省奉新県にて戦死。

《親潮：82・昭和16年9月》：「在学中名誉の戦死を遂げられし故渡辺豪喜君の赫々武勲に対し、先般功七級金鷄勲章並びに勲八等白色桐葉章が下賜の光栄に浴した由御尊父・善之助氏より御通知に接した」

■『北晨(北晨寮図書部)第4号(昭和15年3月16日)』には、特集が組まれ在校生が死を悼んでいる。

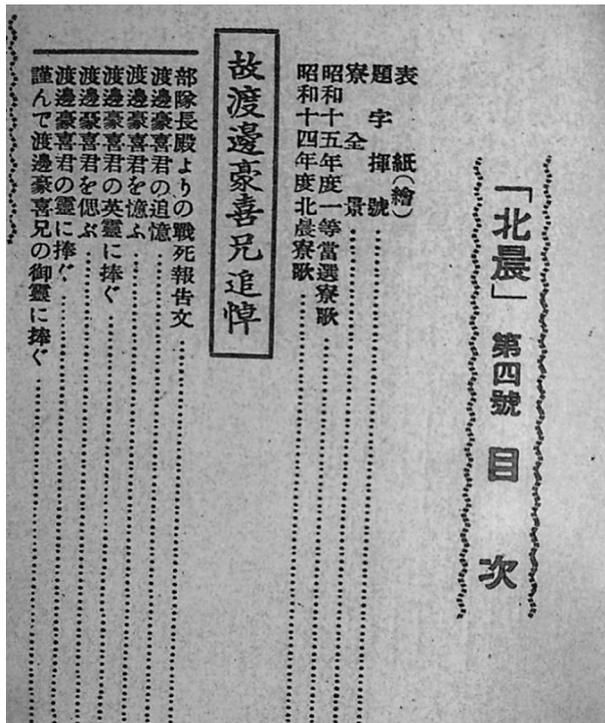


写真5 「北辰4号；追悼号」

6. 学徒勤労働員中の戦死

間山和夫：（三十七期生：製造科）は、昭和20年7月15日に学徒勤労働員（浦河町・日本冷蔵株式会社浦河工場）のさなか北海道空襲（浦河空襲）の際に、グラマン戦闘機の機銃掃射で戦死。

■（箱館昔話8号：平成8年5月発行「函館空襲」）
（村山捨儀・函館高水・同期生・67p～70p）に記述あり）「・・・突然空襲警報のサイレンが鳴り響いた。・・・室蘭方面へ飛行していたグラマンが急旋回、浦河上空に侵入してきたという。・・・間山君は近くの鉄工所の軒下に前伏せに倒れていた。急ぎ病院に担ぎ込んだが、機関銃一発は背中から肺を貫通、一発は腰から股へ抜けていた。致命傷となった背中への傷は小さいが、胸側の傷は意外に大きく出血も多かった。町病院の老医師はオロ、オロするばかりで手の付けようもなく、これが最期であった。その夜、遺体は山手のお寺へ運び、ご本尊の前に安置し、我々学生だけの悲しいお通夜をすごさなければならなかった。・・・」

*一緒に勤労働員に参加した、同窓が記録していなければ一部の人にしか分からず、「語りつぐ北海道空襲」の初版では、「ほかの一人は、函館から来ていた徴用の学生で、名前は間山とだけしか判明していないと言う。」とある。村山さんの同窓を思う、友

情の絆の深さに想いを馳せられる記録である。

*「語りつぐ北海道空襲」（改訂版）北海道新聞社（菊池慶一著）に名前の記載あり。

7. 故郷の戦争展に遺作

昭和18年9月卒小久保節弥：（海軍大尉）は、203空・戦闘三〇三飛行隊に所属し、菊水三号作戦の特攻機護衛のため沖縄周辺の敵機動部隊に向け出撃。零戦で笠之原基地（註：鹿児島県）を発進後、喜界島南方にて、昭和20年4月16日に交戦中戦死。《親潮：253》

■（北大水産学部七十五年史・337p：に記述あり）

（十三期飛行科で、十九年十二月一日付けで中尉に昇進し、戦闘第三〇三飛行隊に配属された戦闘機乗りである。特攻として出撃前の胸をうつ彼の遺書がここにある。「わが父母、わが故郷」（初掲載は《雲ながるる果てに》：白鷗遺族会編）である）。

■（《雲ながるる果てに》：白鷗遺族会編：29pに氏名記載、遺書は190p～192pに掲載。）

遺書「わが父母」

「我が御両親は慈悲深き御両親であった。今にして思えば不幸の数々慙愧にたへぬ。二十有余年の間、斯くも立派に育てて下さった御両親、誠にありがとうございます御座居ました。私は日頃父上の言われる大義に生きます。姉上に対して私は実に不遜な弟であった。無礼の段ひらにお許し下さい。御両親へ孝養の程心よりお願いします。弟に対しては、もっともっと兄らしくしてやりたかった。然し、彼も今は立派な軍人たるの訓練を受けている。おれの言う誠を忘れずに軍務に励むよう祈る。弟の武運長久を祈る。妹よ、あくまでも御両親に孝養をつくしてくれ。末娘のお前をおいて御両親を看てくれと頼む者は他にない。純情で誠を以て世を渡れ、健康に留意されたし。

祖母様、長い間わがママを言い、然も祖母様は何でもはいはいと聞いてくれました。どうか御健康に注意されて、何時までも何時までも御無事にお暮し下さい。」

■《靖国神社社頭掲示》

①（平成元年十一月「わが父母わが家族」）

②（平成二十四年四月「わが故郷」）

遺書「わが故郷」

（註：ご遺族編纂の「句集 はまふゆ」に掲載）

我が故郷（註：愛知県渥美郡伊良湖岬村・現田原市）の何と美しきことよ。四季とりどりの花は咲き、鳥は歌い、山あり、海あり、太平洋の雄大な土用波の光景が眼にうかぶ。

椿は咲く、紅い花が咲く。その下で図画をかいたこと

もあつたっけ。ゑのぐ筆をなめなめ拙い絵をかいた。或いは夕野田に鮎釣りに行った。稲を荒らして叱られたこともあつたっけ。

海！そのもつびびき、何と雄々しき事よ。幼時より海辺に育ち、真に偉大なる海に親しむことが出来た。ドンとうつ波の音は、大古より未来永劫つづくであろう。

我が故郷よ、無尽の幸あれ。そして生まれ来る国の子供等をいつまでもいつまでも育ててくれ。我がふるさと人よ、何時までも何時までも純粋であってくれ。」

■《愛知県田原市博物館》「平成27年・企画展・戦後70年渥美半島と戦争」に、田原出身者の「小久保氏関連資料」として展示される。

○「出陣に際し處感」

「絶えず光輝ある神国の民として某今正に八紘一字の大理想実現の大進軍の一員となるを得たり。男子の本懐之に過ぎざるはなし。今窓外に眼を転ずれば、明々たる月光、出陣に際して、我心も斯の如し唯々念ずるは如何にして、最も仇敵に損害を与えるのみ想ふて見よ大和男子の必殺の攻撃を。」

● 書額「月光明々如我心」



写真6 小久保節彌・絶筆（田原市博物館提供）

「必殺の 年は明けたり 今ぞ今」

「門松や 大和男子の 生きる年」

大日本国に生を受けてよ今まで慈しみ下されし御両親に心より御礼申し上げますどうか御健康に御留意されて、我手柄を笑ってお賞め下さい。

御祖母様、御姉上、妹、車吾よ、御健康をいのる。姉上妹はよくよく御両親の御世話をして下さる様お願いします。親籍の皆様方、本日まで愚生を導いて下さり、有難く御礼申し上げます。

「浜木綿の 霜囲るすといふ 母の顔」
「ゴトゴト（カラコロ）と 凍土にひびくや 父来る」
「そば花（そば）咲けば 石持魚釣らへず 浦澄めり」

昭和二十年一月一日

海軍中尉 小久保節彌

8. 特別攻撃隊員の戦死

1) 昭和18年9月卒の堀口吉秀：（海軍・中尉）は221海軍航空隊・戦闘317に所属し、神風第一航艦零戦隊として台南基地（台湾）から発進。昭和20年1月21日に台湾東方海上にあった米機動部隊・正規空母タイコンデロガに命中大破させ、散華せり）

《親潮：193, 250, 253》

■（北海道新聞：昭和18年9月8日「征くぞ栄光の空へ」～学園に興る歓喜の旋風～）に同氏の名前の記述あり。（写真7の➡矢印）他に戦没者5名の名前の記載）



写真7 海軍航空予備学生の合格

■（北大水産学部七十五年史・334p：に記述あり）（十三期飛行科の堀口は戦闘三一七飛に所属し、一月二十一日正午過ぎ、台湾東方海面の敵機動部隊を神風特別攻撃隊と呼応（註：攻撃本体の一翼として）して攻撃し、壮烈なる戦死をとげた。）

■（「雲ながるる果てに」：白鷗遺族会編：50pに氏名記載）

2) 昭和17年9月卒業 岸 康夫：（海軍・少佐：同窓の中で最高位。）は、特攻隊として、突入の戦死ではないが、最後の特攻の切り札とされた「晴嵐」（パナマ運河攻撃潜水艦所属・特攻機）の機長として富山湾で訓練中に事故にて公務戦死。昭和20年6月19日の事である。

《親潮：219, 250, 253》

《親潮219・昭和57年6月》：弟 岸 壮氏記：

「兄、海軍少佐 岸康夫（17ヨ）の思い出」『・・・特に北晨寮での生活は、多感な青年に大きな影響を与えてくれたようでした。・・・最初の夏休みに、私と妹はねだって寮歌や逍遥歌を教えてもらいました。・・・

昭和17年9月30日、第二期兵科予備学生として佐世保海兵団に集合。翌18年3月まで、台湾の東港で基礎訓練を受けております。・・・その後呉空を経て、六三一空に配属になり、ここで再び徳永信男様（註：同期・漁・卒・台湾で一緒に訓練）と一緒に、亡くなるまで親交を続けさせていただきました。亡くなった後、一か月余りたち、遺体が新潟県に漂着し、その処置をして下さり、遺骨をいただき群馬の郷里まで激しい空襲の中を送り下さったのも徳永様でした。・・・19年秋に突然横須賀から帰って来ました。・・・六三一空に配属されてもおり、前と異なって穏やかですが寡黙で、時に厳しい表情を見せるようになります。・・・最後の帰郷をした20年1月の時、また帰れなくなるよとの一言に、父母以下家族は皆、別れを悟りました。父母が門口で見送り、途中まで一緒にと言う姉妹を制し、小生に「お前来い」名指して家族とわかれしました。途上、予科兵学校に行きたいと言う小生に「無理するな」と一言申し上げておりました。・・・」・・・』

■（北大水産学部七十五年史・339p：記述あり）

『・・・勲五等海軍少佐であることから、彼の偉大な武勲を知る事ができよう。・・・石川県穴水町に母艦を入れ・・・さらに激しい訓練が行われたが。・・・伊号十三潜水艦から発射された岸機は、夜間しかも濃霧のため不測の事故により、無念にも海にのまれたが、後席の部下とライフジャケットを結び合っていたことから。彼の部下思いの優しさが偲ばれて悲しい。・・・』

■（「雲ながるる果てに」：白鷗遺族会編：11pに氏名記載）

9. 海軍予備員制・第一期生の戦死

海軍予備員制は、英国に倣って明治17年8月発足の制度であるが、当初は官立東京商船学校の卒業生全てに適応していたが、昭和18年以降は、戦況の進展に伴い、幹部の不足を補うために、水産講習所遠洋漁業科等の生徒にも適用された。これに伴い、函館高水の遠洋漁業科にも制度が導入され、昭和18年9月の漁労科卒業生は海軍少尉候補として、遠洋漁業科へと19名が進んだ。二期の学生を合わせると40名になる。一期生では4名の方が戦死している。「総員越シ」の起床と共に一日の課業開始。軍艦旗掲揚、武官の閲兵など、訓育寮（遠洋漁業科寄宿舎）での海軍士官候補者としての教育が行われた。

「親潮：253号平成5年11月」

1) 昭和18年9月・漁労科卒の伊藤澄夫は、海軍中尉で輸送艦第十八号に航海長として乗船。三月十六日、回天8基を載せ佐世保を出航。沖縄へ輸送中、渡名喜島付近で米潜《スプリンガー》雷撃で戦死：昭和20年3月18日《親潮：193》

■（北大水産学部七十五年史・337p：記述あり）

（・・・遂に遠漁海軍予備員制の第一期生から戦死者を出してしまった。彼は十九年十月少尉任官。十八輸送艦の航海長として乗り組んだが、三月十八日南西諸島において敵潜の雷撃を受け、沈没し、全員戦死したものである。）

2) 昭和18年9月・漁労科卒の中塚 博は海軍・中尉として防艦能美の航海長で乗船。朝鮮南方海上：済州島北西岸にて、米潜：ティランテによる雷撃で戦死（昭和20年4月14日）

■（北大水産学部七十五年史・337p：に記述あり）

（中家は遠漁予備員制の第一期で、特務艦能美（註：海防艦）航海長をつとめていたが、四月十四日四時七分、朝鮮南方海面にて敵潜の魚雷攻撃を受け、全員壮烈なる戦死をとげた。）

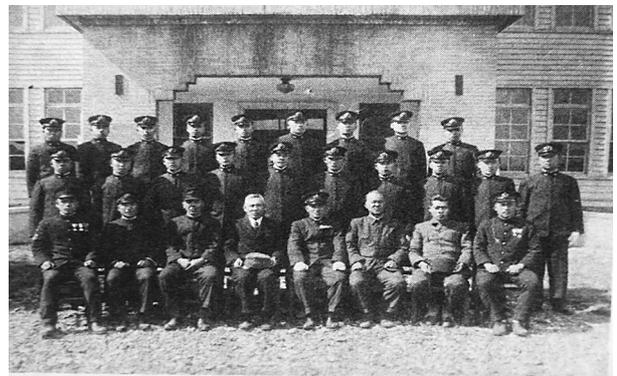


写真8 海軍予備員・一期生

3) 金森 勝はこの項目の1で記述したように、「特務艦・快鳳丸」の航海長で日高厚賀沖で戦死。

4) 菅 博については、次の10「青森・函館空襲の戦死者」に記載。

* 因みに一期の学生を教練する初代武官は、海軍機関学校卒の木下慶一郎中佐で、軍務異動で「空母・翔鶴」の機関長になり、マリアナ沖海戦で米潜水艦の雷撃を受け戦死されている。（同空母には函館師範学校を卒業した4名が同乗しており、同じく戦死。階級の違いがあるので、接点はなかったかもしれないが、函館の街を知る同士が、しばし街の事を話題にしたのであれば、一時の安らぎの時間を共有した

と考える。

10. 青森・函館空襲の戦死者

昭和18年卒の菅 博：(海軍大尉)のは特設特務艦・豊国丸の航海長として、昭和20年7月14日の青森・函館空襲の際に、津軽海峡大間沖にて敵機交戦中に戦死

■(北大水産学部七十五年史・340p：に記述あり)
(予備員一期の菅は二十年六月に中尉に昇進し、特設特務艦豊国丸航海長として乗艦、七月十四日津軽海峡において敵機と交戦中に壮烈なる戦死をとげた。実に終戦の一か月前のことである。)

■《豊国丸戦死者忠霊碑(①青森県大間町大間崎)②碑文「昭和二十年七月十四日 午後二時三十六分米軍 艦載機と交戦激斗 のすえ乗員百三十五名の勇士 船と共にこの 海に眠る」《英霊に捧ぐ》「海を征き 海に散りたる つわもの の 御霊よ永遠にあらかにあれ」

*実習で何度も行き来したであろう津軽海峡を乗船する中で、誰よりも強く他の船舶を守ろうと意識していたのでは無いかと想像している。

11. 朝鮮半島出身者の戦死

昭和16年12月卒の清原寛三は、戦没者の中で唯一の朝鮮半島出身者。本名は韓 秉寛(Han・Byoguan)で、戦死状況は不明である。「親潮」には2度、「北晨」には1度の名前の記載がある。

(親潮88・5p：昭和17年6月)には「会員住所移動」の欄に、清原寛三(昭16漁)改名し「清原秉寛」とする)。

*創氏改名に抗して、名前だけでも本名を名乗ったと考えられるが、「親潮」100号(親潮100・71p：昭和18年12月)には「正田先生退職記念会会計報告」に氏名(清原寛三)が記載されている。以前の名前が使用されており、当時の植民地の人への認識の低さが垣間見られる。

(北晨4号：昭和15年3月発行)には寮生名簿の中に漁労学科第一学年「韓 秉寛」、朝鮮咸南公立中学校卒業とある。現在の朝鮮民主主義人民共和国：咸鏡南道である。

*植民地(朝鮮、台湾)出身の方は、1938年(昭和13年2月)の勅令95(陸軍特別志願兵令)により、志願する者が増えていった。学生で志願しなかった場合に「休学または退学の手続きを強要された」との報告もある。(中央大学史紀要11号：「大学史における学徒出陣と朝鮮・台湾出身学生」)学徒出陣と言え、昭和18年10月21日の神宮外苑の出陣学徒壮行会を想起するが、植民地出身者の壮行会は、これ

とは別に、一か月遅れの昭和18年11月30日に日比谷公会堂において執り行われた(東條は代理出席)。植民地出身の学生の心情の複雑さは計り知れない。

日本で発行されている朝鮮半島出身者の戦没者の人名記録(書籍で最多の2万2千人分)「旧日本軍朝鮮半島出身軍人・軍属死者名簿」(菊池英明編著：新幹社)にも名前の記載はなく、戦死状況は不明である。

IV. 戦いを生き抜く

1. 「おしよる丸」と函館空襲

1) 函館空襲

昭和20年7月14日は、ハルゼー指揮下の米第38機動部隊の艦載機の来襲を受けて、函館市民が犠牲になり、青函連絡が沈められた日である。函館港内の駆逐艦「橘」(葛登支灯台東方、3.4kmの函館湾内で撃沈、135名の戦死。)の戦闘概報には『①5：40敵艦上機来襲、対空戦闘開始。②6：00至急出港。約一時間にわたりグラマン延べ80機の銃爆撃を受く。③6：40右舷至近弾を受け、航行不能。④6：50中部直雷により瞬時にして、右舷に急傾斜。カットシ灯台の90度2哩の地点において沈没せり。』とある。「橘」の攻撃を受けている状況を函館高水の学生は目撃しており、この間、函館の街への攻撃が続き、連絡船、貨物船は防御のすべもなく、次から次へと沈められていった。

2) 「おしよる丸」の英断

この時、港内にいた「おしよる丸」の船長(齊藤一郎：昭和7年漁卒)は、やがて自船も雷撃されると判断し、「部屋から一步も出るな。」の命令のもと、指定の停泊地ではなく艦載機が攻撃しづらい函館山傍に停泊。学生には「君たちは、次世代を背負立たなければならない人間だ。国家、ご両親から預かった命を無駄死にさせる事は出来ない。」と話し、学生の命を救った英断であった。(記事及び写真【帆走を撤去した当時の船影】：親



写真9 おしよる丸II

潮・150号・昭和37年12月）（北海道大学水産学部75年史）

2. 樺太引き上げ船（泰東丸）の遭難者救助

1) 遭難の概要(吉村昭：「烏の浜」はこの事件が主題)

終戦直後の昭和20年8月22日に小樽に向かっていた樺太からの引き上げ船3船（泰東丸、小笠原丸、第二新興丸）が留萌沖で国籍不明（現在では各史料から、ソ連潜水艦）の潜水艦の雷撃を受け沈んだ。その時救助に当たったのが、前述した海軍予備員制・第一期生である。

2) 救助(親潮253号：平成5年11月)

青森県大湊の基地に所属していた施設艇「石崎（津軽半島北東岸の岬より命名）」には、南田雄吉（18年卒・漁労科→遠洋漁業科：海軍予備員制・第一期生）が航海長として乗船。その他に田中房次郎（昭和20年卒・増殖科）が航海士として乗船中。海に漂う遭難者を2隻のカッターと一隻の内火艇で113名を救出。

その中に奇すしくも、土谷光三（昭和19年卒漁労科→遠洋漁業科：海軍予備員制・第二期生）の兄嫁が救助されている。縁の深さを思う。

V. 「親潮」の果たした役割

1. 慰問活動

1) 慰問品の送付

「親潮」の紙面には、度々「慰問品の発送」の記事が掲載されており、80号（昭和16年7月）に8回目の慰問品を贈呈とある。母校で製造した缶詰、慰問文、校内全職員の寄せ書き、「親潮」を梱包し、戦地での活躍を激励した。



写真10 「慰問品の贈呈」：「親潮」59号・昭和14年7月

2) 慰問への御礼

山本 晃・【(陸軍大尉：第二軍司令部、ニューギニアにて戦死：昭和19年9月27日)】よりの御礼の手紙。《親潮：76・昭和16年2月・本人より学校宛》(此の度は図らずも御鄭重なる御慰問の品を賜り厚く御禮申上げます。早速戦友と開き頂戴致しました。御得意の缶詰に就いての一角さが出たのは勿論です。・・・)

また、会員からはの慰問金寄付の申し出が、78号（昭和16年5月）に掲載されている。召集解除の御礼による寄付や逆にこれから出征する記念としての寄付の記事である。慰問が同窓生にとっては重きをなしていたことが伺われる。

2. 同窓生の消息

「親潮」には、「戦地便り」、「幹候便り（幹部候補生）も」「母校の様子」などが紙面を飾っており、情報交流の場としての役割を十二分に果たした。戦地で記事を読む同窓生にとっては、同期の消息を知る手掛かりであり、母校に思いを馳せる、癒しの場であった事は想像に難くない。

1) 戦死詳報

戦争に関する記事が初めて掲載されるのは、40号（昭和12年9月）からで、「軍事郵便二通」と題して林 茂（昭和11年卒・ノモンハンで戦死）らの手紙及び「出征壮行会」（韓国慶尚南道支部）開催の記事である。

戦死の記事が一面に掲載されるのは、44号（昭和13年2月）からで、96号（昭和18年5月）からは101号（昭和19年1月号）を除き、106号（昭和20年3月）まで合計16号分は一面トップに掲載されている。

写真11に示したように87号（昭和17年5月）では、3名



写真11 3名の戦没者：「親潮」87号・昭和17年5月

の戦死の記事が掲載され哀悼を捧げている。90号（昭和17年9月）には1p～3pに亘り、先輩や同期からの記事で埋められた紙面もある。

発行までに集まった情報は直ぐに掲載し、詳報が伝わると戦死から3か月を経ても詳報を掲載するなど、誠意を込めている。

2) 追悼会の開催

追悼会も機会をみて行われており、戦地にて会を持っていない同期にとっては無論の事、遺族にとっても慰めの多い事と考える。なお、回数の減少がみられるが、戦没者が多くなるにつれての開催の日程が困難になっていったと考えられる。



写真12 追悼会「北辰3号」

3. 留守家族、遺族への支援

1) 出征留守家族への激励

出征兵士宅に向かい、激励訪問が「親潮」48号、49号に見られる。全ての事例を掲載したかどうかは把握できないが、件数は多かったと想定される。



写真13 留守宅慰問：「親潮」49号・昭和13年7月

2) 遺族への弔意

葬儀には全国各支部の組織力を活用し、本州各地での葬儀（公的な葬儀で、市町村の責任の下で実施された。）に参列している。これに対してお礼として遺族からの学校への基金への献金や家族から鄭重な御礼の手紙が紹介されている。

*比島にて戦死した昭和14年卒の乾保（昭和17年4月1日に、陸軍少尉として、比島にて敵情偵察中に機関銃腹部被弾し戦死する。在学中はラグビー部の基礎を作る。《親潮91：昭和17年10月、92・昭和17年11月に戦死詳報あり》葬儀への御礼として下記の記事が残されている。

《親潮88：昭和17年6月：乾氏のご尊父様報》
『・・愚息保戦死に就き、深甚なる御弔辞且つ多大な御供を賜り・・・本人も在学中ラグビー部員をいたし居り候事として何か記念のためラグビーボール壹個漸く入手仕候間本日書留小包便にて御送付申上候・・』。

*漸く手に入れたの一文は、親としてお世話になった母校への本人に代わっての御礼と思われる。当時は中々手に入れることのできない品物だけに胸を打つ一文である。

また、96号（昭和18年5月）には「戦没同窓勇士御遺族の美挙」と題し「本会宛に、追善供養のための御寄附に接した。・・」と2名御遺族の方を紹介する文章の記載あり。写真にあるように校内において追悼会が開かれている事への感謝の表れである。

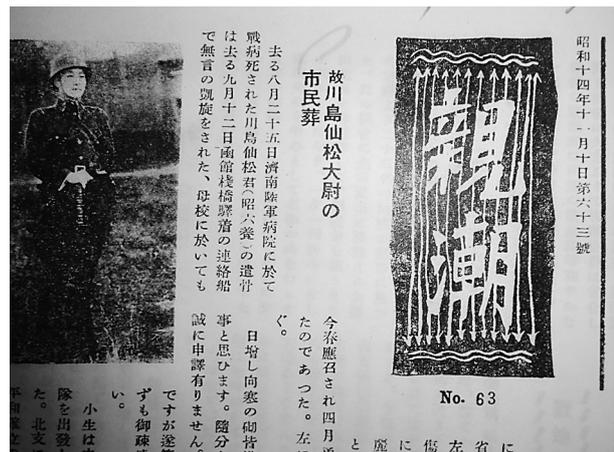


写真14 市民葬：「親潮」63号・昭和14年11月10日

VI. 終わりに当たって

1. 同窓会報「親潮」の精神

時代の荒波の中でも、人生の目的について苦悶しながら

ら、精一杯生きた事実を、可能な限り伝え、同窓の絆を模索しようとした「親潮」の姿勢は、後世に伝えられなければならない。当時の世相からやむを得ない事であるが、戦意高揚の一面もあったことはぬぐえない。これは時代の宿命である。

戦死された方々には、かけがえのない人生がそれぞれあり、息子や兄弟としての人生。または夫や父親としての人生。更には学窓の同期生、友人としての人生があったはずである。名前のみでも北大百年史に残されている事は貴重な事であり、「わだつみのこえ」とは言えなまでも、一人一人の声を記憶として留めおきたいと願った「ドイツ戦没学生の手紙」(ヴィットコップ編・岩波書店)の根底に流れている精神に想いを馳せざるを得な



写真15 壮行式：昭和十八年十一月二十日・北海道新聞

2. 大学史の充実のために

「親潮」の欠号19冊や「北晨」(「北晨」は3, 4号のみ水産学部図書館蔵)の欠号が発見されれば、170名中の不明68名の戦死状況が判明するかもしれない。是非、遺族の方や同窓生の方で、お持ちの資料(戦死に関する資料、手紙、写真等)を連絡いただければ幸いである。大学史の充実にもつながると考える。

紙面の関係で、戦没された方々の「親潮」に投稿した

多数の記事を掲載できなかつた。中には、絶筆の稿もある。一人一人の声を紙面の許す限り、次号(2023年・令和5年発行予定の年報15号)に【続編－II】としてまとめたい。



写真16 遠藤氏最後の手紙：「親潮」64号・昭和十五年一月

【*筆者は現在、北大水産学部学生相談室に勤務しているが、多くの若者と接している中で、平和な一生を送って欲しいと切に願っている。今ウクライナの戦禍のニュースが毎日のように流れており、多くの若者が兵士として亡くなっている事を痛ましく思っている。戦禍は昔の出来事ではない。平和は普段の努力によってしかもたらされない、脆いものと考えてる。】

(2022年・令和4年7月17日・記)

VII. 参考文献

- 1) 加藤陽子：徴兵制と近代日本, 吉川弘文館, 1996
- 2) 加藤陽子：それでも日本人は『戦争』を選んだ, 朝日出版社, 2007
- 3) 田中克彦：ノモンハン戦争, 岩波新書, 2009
- 4) 白井勝美：日中戦争, 中公新書, 2000
- 5) 戸部一郎：日本陸軍と中国, 講談社選書, 1999
- 6) 大貫 恵美子：学徒兵の精神誌, 岩波書店, 2006
- 7) 北海道と戦争上・下, 北海道新聞社, 2015
- 8) 戦後70年 忘れえぬ戦禍, 北海道新聞社, 2015
- 9) 坂本正信：海軍予備士官, 成山堂書店, 1983
- 10) 姜 徳相：朝鮮人学徒出陣, 岩波書店, 1997
- 11) 浅利正俊：教えて下さい, 函館空襲を, 玄洋社, 1991
- 12) 慟哭の海, 北海道新聞社, 1988
- 13) 片桐大白：連合艦隊軍艦銘伝, 光人社, 2003

表 1 ○北大水産学部関係者（北水同窓生）戦没者名簿（敬省略・順不同）令和4年8月15日（7版）：文責・島津 彰

番号	卒業年	氏名	兵種・階級	戦没年月日	戦死・戦病死地	備考
1	明治45年	村林 荘平		昭和20年3月10日	東京	東京大空襲
2	大正3年	辻村吉三郎	会社員	昭和17年5月	南シナ海	三菱商事大阪支店・南方勤務途上・米潜雷撃
3	大正8年	内山 齡	陸軍・大尉	昭和12年12月7日	南京城外	矢ヶ崎部隊
4	大正9年	須堯 健吉	海軍軍属	昭和17年6月29日	スラバヤ	林兼商店取締役・南方経済調査中・戦病死
5	大正9年	下間 秀雄	陸軍技師	昭和17年	京都大学病院	〇〇方面でり患・戦病死
6	大正9年	相沢 国忠		昭和20年3月10日	東京	東京大空襲
7	大正10年	堀田 武一	陸軍・騎兵中尉	昭和13年5月2日	中支・昇山付近	第七師団・第二兵站司令部
8	大正14年	竹井 三郎	陸軍中尉	昭和20年4月19日	日高厚賀・南東・洋上	大成丸・米潜(Sunfish)雷撃・北部軍管司令部
9	昭和2年	西村 憲五	陸軍技師	昭和20年8月5日	比島・ミンダナオ島	十四方面軍野戦貨物廠
10	昭和2年	水上 安蔵	陸軍・中尉	昭和14年7月10日	河南省・山西省境	太行山脉山中
11	昭和3年	福木駿次郎	陸軍・中尉	昭和12年10月26日	上海・江湾鎮	谷川部隊
12	昭和4年	武田 寛	陸軍・軍曹	昭和13年3月23日	北支	
13	昭和5年	鬼柳 克生	海軍軍属	昭和20年5月4日	ビルマ・緬甸	ビルマ方面軍野戦貨物廠
14	昭和5年	大貫 繁信	陸軍少尉	昭和18年7月5日	南方	京都府庁（応召）・（栃木県宇都宮）
15	昭和5年	大塚 厚		昭和20年2/19~3/26	硫黄島	遺族（群馬県佐渡郡島村・妻）
16	昭和6年	萬年 茂	陸軍・工兵中尉	昭和12年10月26日	河北省・贊皇付近	第三野戦道路構築隊
17	昭和6年	川島 仙松	陸軍・工兵大尉	昭和14年8月24日	濟南陸軍病院	北支戦線（兵站電信九中）→戦病死
18	昭和8年	町田喜三矩	陸軍	昭和20年1月17日	比島ネグロス島	福岡県水産行政・応召
19	昭和8年	沢田 欣二		昭和21年9月	朝鮮	戦病死
20	昭和9年	阿部 敏雄	陸軍	昭和20年6月	比島	
21	昭和9年	鈴木 武雄	陸軍中尉	昭和15年5月30日	中支	亀川部隊
22	昭和9年	榎本 光一	陸軍・上等兵	昭和13年2月7日	久留米陸軍病院	昭和12年12月8日・上海兵站病院入院・戦病死
23	昭和9年	中沢 威	陸軍・上等兵	昭和19年9月17日	ビルマ・モーライク	緬甸派遣森2209部隊・戦病死
24	昭和10年	櫻田 一男	陸軍・准尉	昭和17年3月7日	ビルマ	
25	昭和10年	高橋 和夫	陸軍	昭和18年	〇〇陸軍病院	伏字(〇〇)にて戦没月日不明・戦病死
26	昭和10年	酒井 定夫	陸軍・大尉	昭和18年11月19日	第一陸軍病院	戦病死・コレヒドール攻略
27	昭和11年	林 茂	陸軍・上等兵	昭和14年8月26日	ノモンハン	ノモンハン事変
28	昭和11年	遠藤角之助	陸軍・少尉	昭和14年8月30日	ノモンハン	ノモンハン事変
29	昭和11年	鶴田 克人	陸軍・軍曹	昭和14年8月26日	ノモンハン	ノモンハン事変
30	昭和11年	石川 啓介		昭和20年4月	ニューギニア	
31	昭和11年	竹田 政雄		昭和20年	沖縄	
32	昭和12年	竹井 衛	陸軍・上等兵	昭和13年8月10日	環春市・張鼓峯	張鼓峯事件
33	昭和12年	関屋 春夫	陸軍・中尉	昭和19年6月21日	第125兵站病院	ニューギニア/マノクワリ・野戦高射砲732部隊
34	昭和12年	中野 勘助		昭和20年2月	ビルマ	
35	昭和13年	伊藤 俊一	陸軍・軍曹	昭和17年9月27日	ガダルガナル島	工兵第七連隊
36	昭和13年	小柳 直三	陸軍大尉	昭和17年10月26日	ガダルガナル島	一三〇二部隊
37	昭和13年	朝妻日出男	陸軍兵長	昭和17年12月7日	ガダルガナル島	野砲兵第四連隊
38	昭和13年	森田 徹雄	陸軍大尉	昭和17年9月中旬	ガダルガナル島	第125兵站病院
39	昭和13年	斉藤 光治	陸軍大尉	昭和19年5月25日	上海附近	陸軍飛行機・事故（北晨寮歌・作詞者）
40	昭和13年	山木 晃	陸軍大尉	昭和19年9月27日	ニューギニア	第二軍司令部
41	昭和13年	桜井 直紀	陸軍大尉	昭和19年7月17日	東京〇〇陸軍病院	戦病死・陸軍自動車学校・中支転戦
42	昭和14年	乾 保	陸軍少尉	昭和17年4月1日	比島	野戦〇〇隊長
43	昭和14年	近江 栄一	陸軍大尉	昭和20年6月20日	沖縄	歩兵八十九連隊
44	昭和14年	小宮山成功	陸軍中尉	昭和17年4月23日	山西省孝義県宋家	独歩十二大隊・野戦〇〇隊長
45	昭和14年	立川 泰	陸軍	昭和19年	ニューギニア	赤羽の工兵連隊
46	昭和14年	佐藤 秀俱	陸軍		南方・戦死	豊橋陸軍予備士官学校
47	昭和14年	本田 三郎	陸軍		北支	朝鮮会寧歩兵七五連隊
48	昭和14年	市川 俊郎	陸軍		ビルマ	
49	昭和14年	加藤 公一	陸軍大尉	昭和20年6月21日	沖縄	輜重・第二十四連隊
50	昭和14年	千石 炳	会社員	昭和20年8月9/10日	気仙沼市	東北興業KK・気仙沼工場長・気仙沼空襲・被弾
51	昭和14年	江井 全	陸軍大尉	昭和20年5月15日	沖縄	第二十四連隊
52	昭和14年	宮崎敬三郎	陸軍大尉	昭和20年5月2日	沖縄	第二十二連隊・中隊長
53	昭和14年	田中 正道	陸軍		北支	盛岡陸軍予備士官学校
54	昭和14年	野尻 俊彦	陸軍大尉	昭和19年12月30日	比島カンドン西方沖	特設艦船・室蘭丸・暁部隊・船舶司令部・空爆
55	昭和14年	渡辺 豪喜	陸軍・上等兵	昭和14年12月17日	江西省奉新県	飯田部隊・（在学中に応召・卒業認定昭和20年9月）
56	昭和15年	栗村 八郎	陸軍少尉	昭和19年8月21日	ニューギニア	第二二四連隊
57	昭和15年	春山 久弥	陸軍大尉	昭和20年6月20日	沖縄	野砲・第二四連隊
58	昭和15年	佐々 弘		昭和19年3月1日	ニューブリテン島	戦病死・遺族（津山市南新座・父）
59	昭和15年	猪狩 良	海軍・軍属	昭和18年4月10日	南方海域	海軍水路部技手/彼南丸・米潜(トートグ)・雷撃
60	昭和15年	板橋 文勝		昭和19年1月17日	南方海域	
61	昭和15年	野口 健		昭和20年6月	比島	
62	昭和15年	澤田 末三	陸軍中尉	昭和19年7月18日	サイパン島	高射砲25連隊
63	昭和16年3月	泉田 司郎	海軍中尉	昭和19年11月5日	マニラ湾	第一〇七哨戒艇
64	昭和16年3月	中井 佑介	海軍中尉	昭和18年9月19日	南方	海軍予備士官学校
65	昭和16年3月	成田 重光	海軍中尉	昭和18年2月8日	伊豆七島御蔵島沖	輸送船龍田丸・米潜(ターボン)・雷撃
66	昭和16年3月	藤沢 尚美	海軍大尉	昭和20年6月16日	沖縄・小禄地区	海軍三期兵科対潜学校・第二新東丸機雷長
67	昭和16年3月	松浦 敏男	陸軍	昭和17年6月12日	中支江山県虎岩附近	
68	昭和16年3月	佐々木省三	陸軍	昭和19年6月10日	南支	戦病死
69	昭和16年3月	大瀧 繁松	陸軍・軍属	昭和18年春	南方	日本水産株式会社勤務

「函館高等水産学校（北大水産学部）とアジア・太平洋戦争－I」

70	昭和16年3月	山内 清		昭和20年7月	朝鮮	
71	昭和16年12月	吉竹 潔		昭和19年12月	ビルマ	戦病死
72	昭和16年12月	荒川 完	海軍大尉	昭和19年2月9日	トラック島近海	第十期海軍飛行科予備学生・755空・哨戒中
73	昭和16年12月	阿部 清治	海軍・軍属	昭和18年11月	南シナ海	遠洋漁業科在籍につき11月28日卒業認定
74	昭和16年12月	飯島 孝之	陸軍伍長	昭和17年7月28日	〇〇演習場・渴病	〇陸軍予備士官学校の〇演習場・渴病・公務死
75	昭和16年12月	山崎 自康	陸軍中尉	昭和20年1月14日	台湾西方海上	第八飛行司令部
76	昭和16年12月	箕輪 一夫	陸軍少尉	昭和19年4月18日	ビルマ・カーサー県	陸軍通信学校
77	昭和16年12月	種田 金治	陸軍少尉	昭和20年4月29日	沖縄・弁ガ岳	輜重・第24連隊
78	昭和16年12月	鈴木 公憲		昭和19年秋	〇〇軍病院	戦病死
79	昭和16年12月	島田 衷壬		昭和20年9月	ビルマ	
80	昭和16年12月	清原 寛三				朝鮮咸南公立中学卒・本名(韓 秉寛)
81	昭和17年9月	伊藤 勝夫	海軍中尉	昭和20年3月17日	台湾西方海上	虎尾飛行隊→本州へ南京丸：雷撃
82	昭和17年9月	勝木 晃	海軍少尉	昭和21年5月5日	小樽市・自宅	水上特攻「咬龍」・訓練生、自宅にて戦病死
83	昭和17年9月	河合 修	海軍中尉	昭和19年11月21日	台湾北東30哩	戦艦・金剛：米潜(シーライオン)雷撃
84	昭和17年9月	小坂 博	海軍大尉	昭和19年9月3日	ミンダナオ島	九五五空・ダバオ上空・敵機交戦
85	昭和17年9月	田中 裕	海軍中尉	昭和19年9月21日	愛知県師崎南東沖	第二河和海軍航空隊・特殊飛行訓練中・公務死
86	昭和17年9月	湯地 定勝	海軍大尉	昭和20年2月16日	木更津上空	二五二海軍航空隊・戦304/空襲敵機迎撃
87	昭和17年9月	尾崎 一郎	海軍中尉	昭和20年1月9日	台湾西方海上	第三号海防艦・航海士・敵機交戦
88	昭和17年9月	中田 弘基		昭和20年7月7日	ルソン島	遺族(函館市五稜郭・父)
89	昭和17年9月	田中 健夫	陸軍少尉	昭和19年6月7日	南方	遺族(兵庫県東磨白濱町・父)
90	昭和17年9月	板橋 武夫	陸軍中尉	昭和20年3月15日	比島	レイテ島
91	昭和17年9月	岸 康夫	海軍少佐	昭和20年6月19日	富山湾	特攻機：晴嵐・訓練中の公務戦死
92	昭和18年9月	伊藤 澄夫	海軍中尉	昭和20年3月18日	渡金喜島付近	第18輸送艦・航海長・米潜(スプリンガー)・雷撃
93	昭和18年9月	金森 勝	海軍中尉	昭和20年4月19日	日高厚賀・南東・洋上	特務艦快鳳丸・航海長・米潜雷撃・NO5参照
94	昭和18年9月	小久保節弥	海軍大尉	昭和20年4月16日	喜界島南方	戦闘三〇三飛・菊水3号作戦・米機動部隊
95	昭和18年9月	小菅 一郎	海軍中尉	昭和19年12月19日	台湾北方海上	空母・雲龍(航海士)・米潜(レッドフィッシュ)雷撃
96	昭和18年9月	菅 博	海軍大尉	昭和20年7月14日	青森・大間崎沖	特務艦豊国丸・航海長・敵機交戦・青森空襲
97	昭和18年9月	中家 博	海軍中尉	昭和20年4月14日	濟州島北西岸	海防艦・能美・航海長・米潜(ティランテ)・雷撃
98	昭和18年9月	堀口 吉秀	海軍中尉	昭和20年1月21日	台湾東方海上	神風第一航空艦隊零戦隊・米機動部隊・特攻
99	昭和18年9月	蒲沢御代太郎	海軍中尉	昭和19年9月26日	ペリリュー島	西カロリン航空隊・飛行場要務・玉砕
100	昭和18年9月	山田 貴	海軍中尉	昭和19年12月29日	比島サンホセ南方	七六五空・戦闘攻撃一〇二飛・彗星・米船団
101	昭和18年9月	富田 光政	海軍大尉	昭和20年6月19日	東京上空	厚木航空隊・B29迎撃(農学部水産学科)
102	昭和20年卒認	安部比良雄	海軍少尉	昭和20年3月31日	九州・大村飛行場	20年9月卒業認定・大村空・大村飛行場・空襲
103	三十七期生	間山 和夫	学徒勤労動員	昭和20年7月15日	北海道・浦河町	製造科2年・日本冷蔵浦河工場・浦河空襲

- 出典 ① 「北大百年史」部局史(1980年3月20日発行)
 ② 「親潮」(函館高水・函館水産専門学校校・同窓会報)
 ③ 「北海道大学水産学部七十五年史」(1982年9月30日発行)
 ④ 「纜」(函館高等水産学校・昭和14年卒同期会・洋々会編)(1981年4月28日発行)
 ⑤ 「親潮」・北海道大学水産学部創基五十周年記念誌(1957年10月6日発行)
 ⑥ 「北晨」(北晨寮図書部3号・4号)(3号・1939年《昭和14》3/5),(4号・1940年《昭和15》3/16発行)
 ⑦ 「海軍飛行科予備学生・生徒史」(海軍飛行科予備学生・生徒史刊行会)(1988年4月29日発行)
 ⑧ 「箱館昔話」8号(函館パルス企画)(1996年5月1日15日発行)
 ⑨ 「海軍予備学生」(蛭名 賢造著)(中公文庫)
 ⑩ 「戦後70年 北海道と戦争 上・下」(北海道新聞社)(上・2015年7月10日,下・2015年11月11日発行)
 ⑪ 「青森空襲の記録」(青森市・「青森空襲の記録」編集委員会)(1972年7月28日発行)
 ⑫ 「記者たちの戦争」《大成丸関係》(北海道新聞労働組合)(径書房)(1990年7月25日発行)

(謝辞：同窓会報「親潮」の調査に際し、北海道大学水産学部図書館、並びに北海道立図書館北方資料室の職員の皆様方に、ご協力を戴いたことに謝意を表します。文献の保存は劣化との闘いではありますが、貴重な資料を保存して頂いている事に改めて敬意を表します。)